

熱気 屋台で胃文化交流

共生のまち 生野



フォーやパインミーを売る屋台で客を呼び込むホアンさん(中央)＝いずれも大阪市生野区



夜市の舞台でサーカスが披露され、運動場に大勢の人が集まった

開校した大阪市生野区の小学校跡で、3年前から「いくの万国夜市」が開かれている。約80カ国の人々が暮らす生野を象徴するように、多国籍な料理の屋台が集まる。仕掛け人は食を通して「胃文化交流」を掲げ、街に身を投じていた。

10月11日、小学校跡にできた交流拠点「いくのパーク」で夜市があった。3家族で訪れた近所の男性(42)は「地元でこれだけいろんなお店を楽しめるのはいいですね」と、料理や飲み物を広げて談笑していた。

「大勢の人が飲んで食べておしゃべりして。跡地活用の話を初めてもらった時に浮かんた風景です」と松本篤さん(50)は言う。飲食店を中心に約40店舗を展開する企業「RE.TOWN」代表。夜市の主催者だ。

原点は阪神・淡路大震災にある。大学生だった松本さんは、地元・神戸のバーでアルバイトをしていた。地震の後、店のオーナーは「こんな時こそ」と、いち早く店を再開。大勢の客が訪れ、「暗い街に明かりがともったようなにぎわいで、一軒の店でも街に与えられるインパクトは小さくないと感じました」。

大学卒業後に飲食チェーンのコンサル会社に勤め、2004年に独立。経営店舗を増やしつつ、「まちづくり事業」に乗り出す。最初は大阪・難波にある商業ビルの再生。大阪市大正区では、河川敷の複合施設を20年にオープンさせた。



リタウンの松本篤代表

万国夜市4年目 めざす「常設」

翌年、生野区が閉校になった御幸森小の跡地活用事業者を公募。若者でにぎわうコリアタウンから数十軒の好立地にあり、松本さんは応募に動いた。

知人の紹介で、ある男性と会った。地元住民らでつくるNPO法人「IKUNO・多文化ふらっと」の宋悟さん(64)。地域で外国にルーツをもつ子どもへの支援活動を続け、コリアタウンの事務局長も務める。

「小学校跡を多文化共生の拠点に」と言う宋さんに、松本さんは「まちづくりと社会課題の解決。一緒にやれたら面白い」と直感した。

両者は共同で跡地活用

に応募し、事業者に選ばれた。同NPOは元校舎に支援教室や図書室を開き、テナントとして飲食店や習い事教室が入居。松本さんは「覚悟を示すため」と本社を小学校跡に移し、万国夜市を企画した。

多国籍の出店者を募るため、地域の店を訪ねて回った。22年10月の初開催から大勢の人でにぎわい、3年で計12回を数えた。昨年度からの2年間は区の事業と連携し、コリアタウンでも夜市を同時開催している。

今後は、常設の夜市をめざすという松本さん。「日本有数の多国籍な人々が暮らす街で、夜市をシンボルとしてインバウンドを呼び込めれば、まだまだ生野は盛り上がるはず」。筋原章博区長は「国籍に関係なく働ける場所としても、常設夜市を実現させたい」と連携を深める。

きょうあす開催

13回目の夜市は8、9両日午後4～9時、いくのパークで開催。韓国フエアとして韓国料理の屋台が並び、歌や踊りの舞台もある。(玉置太郎)